

### ◎ 正文のない日米和親条約

前稿で触れた、ペリー提督の来訪の結果安政元年(1854)に締結された日米和親条約には、「正文」が存在しなかった。日本側の交渉当事者、大学頭 林復斎は昌平黌における漢文の大家であったが、これは米国側に日本語通訳が不在だったため、広東から宣教師ウィリアムズを連れてきて漢文で交渉に当らせたためである。日本人の知識階級は総じて漢文の素養に恵まれていたため、漢文による条約交渉が可能だったのだ。

条約の調印は3月31日(旧暦3月3日)に行われ、日本語、漢文、オランダ語、英語が準備されたが、林大学頭は署名直前に日本語以外は正文と認めない、と主張し日本側全権 松崎応接掛は日本語版にしか署名しなかった。一方で米国側は英語版を正文と主張し、ペリーは英語版にしか署名していない。つまり双方全権が署名した正文が存在していないことになる。これは批准に際して米国議会で問題になったが、実はこの事件は日本の開国にとっては象徴的な出来事であった。

### ◎ 横濱中華街の形成

何故かという、ペリー同様、開国以降日本進出を目論んだ列強各国のビジネスマンは、まず言語問題を解決する必要があったからだ。つまり210余年の鎖国の間、日本語通訳が養成される機会は殆ど皆無であった。唯一長崎貿易が許されていたオランダ人には勿論日本語を習得する者もいたが、日米和親条約以降の列強進出はオランダとの競合の中で行われたため、利害のからむ通訳業務をオランダ人に依存することはなかった。日本国内の外国語事情も全く同様である。

そこで列強ビジネスマンたちは、漢文を理解する日本人との交渉を中国人に依存することになり、日本への渡航前に主として上海・広州・香港にて中国人通訳を雇い来日に際して同伴した。これを「買弁」という。買弁とは、もともとは広州の西洋商館で働いていた世話人で、中国語で西洋人商人の生活全般の面倒を見ていたが、貿易実務を通じて経済交渉の仲介的存在として重要な機能を果たし始め、開国に併せ大勢の買弁たちが日本に渡航してくるようになった。

こうした中国人たちが横濱中華街を形成する。開港1年半後の文久元年(1861)時点で126人の外国商人が横濱にいたが(イギリス人54人、アメリカ人38人、オランダ人20人、フランス人14人)、同時期に約100人の中国人が横濱に暮らしていたと言われている。

### ◎ 中国人の在住根拠

列強各国のビジネスマンたちは、各国と日本間の条約に基づき正規に入国した人々(条約国人)だったが、

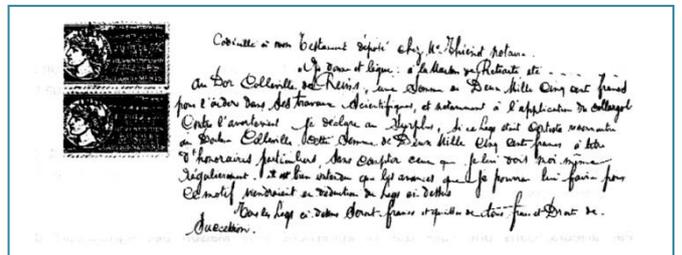
明治4年(1871)の日清修好条規締結まで、中国人買弁は条約国人の随行者という立場に過ぎず、その商業活動も限定的であった。この間、中国人は明確な在住根拠を持たなかったため、慶応3年(1867)「横濱外国人居留地取締規則」に基づき条約未済国人に関する「籍牌(住民登録)規則」が制定された。この時点で籍牌を受けた中国人は660人にのぼる。この籍牌制度の制定と同時に、これを管理する神奈川奉行所との連絡・交渉を行う華僑組織「中華会館」が結成される。

### ◎ ジェラルルの遺言状のなかの中国人

さて数十年後に話は飛ぶが、60歳で自らの日本コレクションのランス市への寄贈を済ませたジェラルルは67歳、すなわち没年の10年前に養老院に入居し、これを機に遺言状を書き始め、その後何度か書き直しを行っている。ジェラルルは横濱のジェラルル商会を基礎とする自らの資産を晩年の活動の柱であった「レモア農業サークル」につき込んだが(その詳細は次稿に譲る)、家族を持たなかったジェラルルは、遺言状によりこの資産を財団や親族に広く配分している。コレクションを市に寄付し日本美術・民芸品の鑑賞を一般の人々に供したのと同様、公共の利益に資することをその晩年の最大の目標とした「博愛家」ジェラルル、と称される所以である。

その遺言の付属書に以下の文面がある。やや冗長となるが引用したい。

「私は本文書において以下の修正相続を提起する。Alfred Hapo-King は私の横濱の前工場長だが、現在病魔に侵されている。私の相続財産の一部3,000フランを彼に特別相続として与え、彼の二人の息子、一人は中国に住むGrégoireへ、そして横濱に住むもう一人のAlfred Yukkioiuにそれぞれ1,000フランを相続人として受取る権利を与える…(中略)…2,500フランを特別相続とし、病気見舞金としてHapo-Kingに与え、万一彼が死去した場合には別途、その息子GrégoireとYukkioiuに各2,500フランを葬儀の前に与える…(中略)…Hapo-KingとDevézeに対しその3ヶ月分の給与相当額を相続する。また、私の横濱工場の全ての労働者及び従業員に対する利益供与のために同相当額の相続を行う…(中略)…私は横濱のバンド188番地ならびにブラフ77、78、79、80、81、91、200番地更に浜浦丘の土地の所有権がHapo-Kingあるいは横濱在住のその子息であり私の名付け子であるYukkioiuに対し偶発的に相続されることを妨げない。」



ジェラルルの遺言状(部分)

### ◎ 上海のフランス人ネットワーク

この遺言状に登場する Devéze (ドゥヴェーズ)はフランス人で明治 15 年(1882)以降、ジェラル工場の経営権を譲り受けた人物である。外国人住所録を調べると慶応元年(1865)以降、横濱の商館の社員としてその名が見えるが、それ以前には上海の外国人住所録に記載がある。また、レイノー、ガローといったフランス人がジェラル帰仏後のジェラル商会の経営に係わるが、彼らも上海経由で横濱に入ってきたことが分っている。こうして上海での人脈をもとに横濱のフランス人ネットワークが形成されており、ジェラルは帰仏後も商会のオーナーとしての地位を保持しながら、こうしたフランス人に経営を任せることができた。

### ◎ Hapo-King と Yukkiou

そして遺言に出てくるもうひとりの商会経営者がハポ・キンという中国人である。ジェラルは遺言状に「前工場長」と記載しているが、工場の経営権を保有したドゥヴェーズと同等以上に扱われている。「ローニン」同様に仁義を大切にしていたジェラルにとって、この中国人は上海から共に横濱に入ってきた買弁だったのではなからうか。前稿に見たように、ジェラルは既にドイツ、イギリスで英才教育を受けた一流の貿易商だったが、やはり言葉が通じない横濱で半年の内に起業に辿り着くには優秀な買弁の経営サポートが必要であったに違いない。それが、ハポ・キンであったと考えると、晩年のジェラルが遺言状で彼への相続を篤く与えた意味も納得できよう。

更に気になるのがユキオという日本人名を持ったハポ・キンの息子の存在である。グレゴリーというもう一人の息子は中国(おそらくは上海)に在住しており、クリスチャンネームを持った中国人と考えられるが、ユキオは一体何者だったのだろうか。

子供のいないジェラルは晩年好んで名付け親になったと言われ、前稿で紹介した甥のジェラル・カードル氏もその一人だった。ジェラルによってアルフレッド・ユキオと名付けられたハポ・キンの「もうひとりの息子」は横濱に住んでおり、しかも工場・事務所を含む横濱の土地の永代借地権をこのユキオに相続しようとしていた(現実にはジェラルの死後の昭和 2 年に横濱市に買取られた)ということは、横濱に永住することを「期待されていた」ということだろう。

ジェラルの伝記の著者ギュヤール女史は、ユキオがジェラルの子供だった可能性を示唆している。彼女が指摘するようにフランスの小説家ピエール・ロティ宜しく現地妻を持ち、子をなした可能性は否定できないだろう。何らの事情で妻は去り、残された息子を、肝胆相照らす仲の中国人ビジネス・パートナーの養子として引取ってもらった、ということだろうか。

### ◎ 埋もれた歴史の中で

もしもギュヤール女史の想像が当たっているとすれば、これは横濱という国際都市ならではのエキゾチックな物語かもしれない。私たちは現在でも固い絆で結ばれた中華街の華僑の人々の生活を知っている。ハポ・キンも、あるいは中華会館に保管されているだろう籍牌の写し、あるいは華僑の同郷集団として現在も残る郷幫(きょうばん)の「広東幫」の古い名簿にその名前を見つけることができるかもしれない。そしてユキオもこの遺言状の書かれた時点で恐らく 40 歳半ばというところ。元町、山手界隈にその足跡は残っていないだろうか。この二人の人生がトレースできれば、ジェラルの新たな側面も見えてくるかも知れない。

### ◎ ジェラル商会のあった場所

実はジェラルが文久 3 年(1863)の来濱と同時に購入した借地権のひとつ、バンド 169 番地(地番変更後の 188 番地)に建てたジェラル商会の本社(後にジェラル・ビルと称された)の建つ位置こそこの物語にとって象徴的な場所であった。

現在の山下町 188 番地には中華料理店のビルが建っているが、その正面は「山下町公園」で、現在も小さな東屋が建っている。ここには明治初年に有力な中国人の建てた「会芳楼」という名の劇場・料亭を兼ねた娯楽場があり、中国人のみならず、日本人・西洋人を問わず非常な賑わいを見せていた。明治 10 年(1877)には会芳楼は姿を消すが、明治 16 年(1883)にはこの地に清国領事館の新館が建てられる。やがて横濱に一時身を寄せた孫文によって明治 44 年(1911)辛亥革命が起こり中華民国領事館に変わって、関東大震災で建物は崩壊する。平成 12 年(2000)に行われた山下町公園の発掘調査によりジェラルの瓦が多数発見された。ジェラル商会の正面に建っていた会芳楼も清国領事館もジェラル瓦の生きたモデルルームだったのだ。

ジェラル自身はブラフ 77 番地を中心とした現在の元町公園の工場敷地内に自宅を持ち、そこから中華街にあるこのジェラル商会に通勤していたと考えられている。フランスと日本と中国、横濱というコスモポリスにおいて、ジェラルのビジネスの諸相には常にこの三つの国と文化が混在していたことになる。

[参考資料]

『ペリー艦隊 日本遠征記』(オフィス宮崎編訳/万来舎)

『開国日本と横浜中華街』(西川武臣・伊藤泉美/大修館書店)

「アルフレッド・ジェラルと瓦工場」(青木祐介/「横浜都市発展記念館紀要第 5 号」)

”Alfréd Gerard-le champenios

de Yokohama” (Huguette Guyard/Presse Mumérique)



山下町公園の「会芳亭」とジェラルビル跡(右手ビル)